

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720244

研究課題名(和文) 用法基盤モデルに基づく前置詞の文法・談話機能の研究：文法化と意味拡張の認知的基盤

研究課題名(英文) A usage-based analysis of the grammatical and discourse functions of English prepositions: The cognitive foundation of grammaticalization and semantic extension

研究代表者

大谷 直輝 (OTANI, Naoki)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：50549996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、前置詞の文法機能と談話機能の体系的な記述を行い、前置詞の意味拡張や機能範疇の変化を動機づける認知的な基盤を考察した。本研究の成果は『A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions』(179頁)として開拓社より出版された。また、overとunderの非対称的な機能・意味を『English Linguistics』と『言語研究』に、upの完了用法を『言語の創発と身体性』で発表した。また、定量的な言語分析の研究手法を『認知言語学研究の方法』で提示した。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to describe the grammatical function and the discourse function of English prepositions systematically, and analyzes the cognitive bases of these grammaticalized functions. The study was compiled, and published as a book "A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions." Some of the studies were presented in journal articles, book chapters and conference proceedings. For example, the study of "over" and "under" were published in "English Linguistics" and "linguistic studies," and the quantitative method to analyze polysemy were introduced in the book "the methods of cognitive linguistic research."

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：認知言語学 用法基盤モデル 前置詞 文法機能 談話機能 意味拡張 多義性

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、コンピューターの発達により、大量の言語データを用いた定量的な言語分析が可能となり、大量の言語データを収集した言語コーパスを用いた分析が盛んに行われている。

(2) このデータ面での大幅な進歩により、これまでは学際的な研究が少なかった機能言語学の諸分野(認知言語学、談話機能言語学、会話分析、社会言語学など)が、用法基盤モデル(Usage-based Model)という共通の理論に基づいて統合しはじめ、言語の動的・創造的な側面の実証的な研究が促進されている。この学際的なアプローチは、次の2点の言語観を共有している。

(a) 言葉の新しい意味や機能は言語使用の場からボトムアップ的にたち現れ定着する。

(b) 言語表現は経験的な基盤に基づいており、人間の外界認知を反映する。

従来の言語学の分析では、十分な言語データがないため、語句に固有の静的な特徴や、必要十分条件で定義できる客観的な特徴を主な考察対象としていた。しかし、豊富なデータを使用できる現在、使用の場でゆらぎながら定着していく言語の動的な側面を分析する準備が整っている。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究では、学際的な視点を持ちながら、英語の前置詞が持つ様々な統語的・意味的・談話的特徴を体系的に記述し、それらを動機づける基盤を考察する。また、研究全体を通じて、用法基盤モデルに基づく実証的な研究方法を示すことで、学際的な研究として認知されつつある用法基盤の言語学の様々な学際的な研究に有効な、研究モデルの提示を行う。さらに、得られた知見を英語学や英語教育へ応用して、実際の言語使用を反映した教材開発を行う。

(2) 本研究は、具体的には、以下の三点の研究を行うことを目的とする。第一に、これまでに構築した定量的な意味分析モデルを精緻化して、言語の意味を定量的に論じる実証的な方法論を提示する。第二に、前置詞が持つ文法機能と談話機能の体系的な記述を行う。特に、意味拡張と文法カテゴリーの変化(文法化)の双方に注目して、これらの言語変化を動機づける認知的基盤を考察する。第三に、研究成果を言語理論と英語教育へ応用する。特に、学際的な言語研究や類型論的な言語研究に対して実証的な方法論を供給したり、言語の動的な側面を解説した英語教材の開発を行う。

### 3. 研究の方法

(1) 1つ目の研究目的の実証的な言語分析手法に関しては、文が持つ意味的・談話的情報

を定量化するために、Atkins(1987)による意味の分類基準や、WordNet(シソーラス)などを使用することで、客観性の高い分類基準を提示し、言語コーパスを用いた分析手法の精緻化を行う。

(2) 2つ目の研究目的の前置詞が持つ文法機能と談話機能の体系的な記述に関しては、様々な前置詞の用例を体系的に収集するとともに、代表的な前置詞が持つ文法機能と談話機能に見られる文法的・意味的特徴を記述することで、前置詞の体系内に見られる特徴を動機付ける認知的な要因を考察する。

### 4. 研究成果

(1) 先行研究では体系的な記述がなかった前置詞の機能に関する記述を行い、これらの機能を文法的機能・談話的機能・直示的機能という三種類の機能に分類した。これらの前置詞の機能は、単著『Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions』にてリスト化をして提示した。また、前置詞の機能を動機付ける認知的な基盤に関する考察を行い、論文を執筆した【雑誌論文】。

(2) 上下軸に関する英語の前置詞を考察対象として、人間の認識の仕方がどのように前置詞の非対称的な振舞いを動機付けるかを考察した。overとunderに見られる非対称的な意味拡張や、異なる文法機能に注目して、それらがどのように動機付けるかを考察することで、上下に対する非対称的な認識が文法機能に影響を与えていることを明らかにした。以上の成果は、二本の論文にまとめられた【雑誌論文】。

(3) 類義的な動詞不変化詞構文(burn up, burn downなど)に見られる、反義的な前置詞の非対称的な振舞いに注目することで、語彙レベルの反義性から構文レベルの類義性が生じる過程を、コーパスを用いて定量的に考察した。結果として、動詞不変化詞構文で用いられる不変化詞には動詞指向のもと、目的語指向のものがある点を明らかにした。また、downに比べてupの方が意味拡張や意味の漂白化が進んでいる点を明らかにして、英語コーパス学会で発表を行った。

(4) コーパスを用いた独自の実証的な研究手法を、英語の前置詞だけでなく、様々な現象に応用する可能性を検討した。まず、用法基盤に基づく言語学において質的なコーパス研究を普及させるため、英語コーパス学会東支部でシンポジウムを開催した。また、コーパスを用いた研究手法を、日本語の指示詞の研究に応用をして、「こ」「そ」「あ」の非対称的な振舞いを、定量的に考察した【雑誌論文】。

(5) 言語分析の研究成果の応用を行った。特に、大量の言語データを用いた英語の語法研究や、認知言語学の手法を用いた言語の基盤研究に関する成果を応用して、英語の CALL 教育の教材の作成や、辞書の執筆を行った。特に、コンピューターの発達とともに普及が進んでいるオンラインの教材の作成に注目して、言語の理論や方法論を生かした CALL の英語のコンテンツ開発に関する原稿を執筆した【図書】。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### 〔雑誌論文〕(計6件)

Otani, Naoki and Fumino Horiuchi, The Grammatical Function of *Under* as a Head of Protasis: From Spatial Senses to Grammatical Functions, *English Linguistics*, 査読有、2013、30(1)巻、169-190.

大谷直輝、語彙の多義性を再考する：前置詞の意味と機能の連続性を中心に、日本認知言語学会論文集、査読なし、13巻、2013、108-120.

大谷直輝、前置詞の文法的振舞いと身体的な基盤：境界性と接触性に注目して、日本認知言語学会論文集、査読なし、13巻、2013、649-654.

大谷直輝、"John walked *over/under* the bridge" に関する一考察 文法の身体的な基盤と百科事典の意味、言語研究、査読有、141巻、2012、47-58.

大谷直輝、条件節を導く *under* について：文化化と身体性の観点から、日本認知言語学会論文集、査読なし、11巻、2011、592-595.

小川典子・澤田淳・大谷直輝、日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析、関西言語学会プロシーディングス、査読有、30巻、2011、96-107.

##### 〔学会発表〕(計7件)

Otani, Naoki, Asymmetrical characteristics of up and down within synonymous verb-particle constructions in English, 5th UK Cognitive Linguistics Conference, Lancaster University, United Kingdom, 29 - 31 July 2014.

Horiuchi, Fumino and Naoki Otani, The Control Senses Revisited: The Case of the Prepositions Over and Under, 5th UK Cognitive Linguistics Conference, Lancaster University, United Kingdom, 29 - 31 July 2014.

大谷直輝、*over* と *under* の支配的意味に見られる非対称性：認知言語学に基づ

く英語の意味研究、京都府立大学英文学会(第5回)、京都府立大学、2013年10月6日

大谷直輝、類義的な動詞不変化詞構文における不変化詞のアスペクト特性：*up* と *down* を中心に、英語コーパス学会(第39回)、東北大学、2013年10月5日

大谷直輝、語彙の多義性を再考する：前置詞の意味と機能の連続性を中心に、日本認知言語学会(第13回)、大東文化大学、2012年9月8-9日

大谷直輝、前置詞の文法的振舞いと身体的な基盤：境界性と接触性に注目して、日本認知言語学会(第13回)、大東文化大学、2012年9月8-9日(ワークショップ)

大谷直輝、句と節が持つ談話機能について：コーパスを用いた従属性仮説の検証」『文を超えたコーパス研究：「定量」的な分析から「文脈」重視の分析へ、英語コーパス学会東支部主催課題別シンポジウム、慶應義塾大学、2011年7月9日

##### 〔図書〕(計3件)

Otani, Naoki, Kaitakusha, 単著、A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions, 179, 2013

大谷直輝 他、ひつじ書房、不変化詞の完了用法の参与者指向性について、479-492, 2013

大谷直輝 他、開拓社、言語理論を生かした CALL のコンテンツ開発、424-439, 2012

##### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ

<https://sites.google.com/site/naokiotani1979/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大谷 直輝 (OTANI, Naoki)

京都府立大学・文学部・講師

研究者番号：5054996

### (2) 研究分担者

なし